

HIMALAYA

ヒマラヤ

No. 308



1997 JULY



日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

HAJ 30周年記念行事資金協力をお願い

HAJは、1967年10月に創立され、緒先輩達の努力により本年、30周年を迎えることになりました。これを機会に記念の幾つかの行事を行うこととなりました。概要は下記のとおりであります。執行部としましては、これらの行事にかかる費用につきまして、極力外部資金の導入などを計って賄う予定であります。会員の皆様にも資金のご協力を仰ぎたくここにお願い申し上げます。

記

1. お願いする金額：一口 1万円
*機関誌「ヒマラヤ」誌上にて氏名・口数を公表します。(匿名を希望される方は、その旨ご連絡下さい。)
2. 記念行事の概要：
 - 1) 式典関係：
式典：1998年1月25日(日)(300名程度を予定)
午前：日本人ヒマラヤニストによるパネ

ルデスカッション

午後：ネパール、インド、パキスタン、中国から登山関係者を招請し、それぞれの国の登山環境の現状と問題点について講演をお願いする。

夜間：記念祝賀会

2) 出版関係：

1. HAJ 30年間の行動記録： 500部
2. ヒマラヤ日本隊のまとめ： 500部
3. ヒマラヤ日本隊遭難事故事例集：1000部
4. 機関誌「ヒマラヤ」総索引 200部

3) 野外関係：

それぞれのヒマラヤ諸国で行われる行事にあわせて臨時派遣。

4) 写真展：

会員からヒマラヤの「この一枚」を募集し、展示する。

表紙写真

'85夏、フンザの村で毎日毎日山々を眺めて生活していた。一応ウルタルⅡが未踏である事は知っていて、登ってみたいとも考えていたように思う。そして12年後、ディランの頂からフンザの村と数日前に既踏となったウルタルⅡを見た。

(岩崎 洋)

ヒマラヤ No.308

1. インド登山界に残した不朽の足跡 稲田 定重
2. ギャ初登頂に意義あり
8. シプトン・ティルマン縁の峠に挑む
9. ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・インフォメーション・トピックス・ヒマラヤから〉
15. 1997年ブータンの祝日
16. ネパール登山の手引き(6)
19. ニンチン・カンサ(7,206m)登山計画
24. 寸感・事務局日誌

追悼 H. C. サリーン氏

インド登山界に残した不朽の足跡

稲田 定重

1997年1月27日、サリーンさんがお亡くなりになられた。83才であった。

氏は、1966年から89年まで23年間にわたりインド登山財団（IMF）の総裁をつとめられ1989年から4年間はUIAAの副会長も歴任されている。正にインド登山界の巨星であった。IMFが出来たのは1958年であり、インド登山界の本格的活動が始まるのが60年代である。当初、デフェンス・ブロックの一角にあった小さな小屋のようなIMFオフィスは、今、デリー郊外に堂々たるコンプレックスを構えている。スポーツマンであると同時に優れた行政テクノクラートであったサリーンさんの遺産である。1983年、IMF創立25周年が開かれたが、時の首相インディラ・ガンジーをはじめとした多くの政財界関係者も式典に参列し、IMFを支えるバックグラウンドをかいま見た。自らを「山の娘」と称したインディラ・ガンジー首相は、サリーンさんに厚い信頼を寄せており、また、ネルーにはじまる歴代首相は、インドにおける登山という行為に特別のステータスと支援を与えてきたように思われる。

サリーンさんは、1981年8月にHAJの招きで来日され、10日間、東京・仙台・札幌と回られ、各地の研究会や歓迎の行事に出席されたが私もこの間、氏と共に行動することが出来、さまざまな思い出をいただいた。折悪しく台風19号に見舞われ、ひどい交通混乱の中での移動であり若くない体には大変な強行スケジュールだった。氏は、何一つ愚痴もこぼされず、かえってセンス溢れるユーモアで随行の人間たちをいつも明るくさせていた。ネパール大使などもつとめ、優れた外交官でもあった氏の豊かな人間性と教養を随所に感じた旅だっ

た。

今、あらためて氏の経歴をふりかえってみると極めてオールラウンドな人となり后感嘆する。

行政・政治の分野では、鉄鋼・工業大臣、アンドラプラディシュ・アッサム・グジャラットの各州知事、ネパール大使などの要職を歴任している。また、テニス・バドミントン・クリケット・ホッケーなどの優れた競技者であり、ユースホステル運動の熱心な推進者であった。北欧諸国を2千マイル自転車で旅をしたり、ヒラリーのオーシャントスカイの冒険に参加もした。来日の折りにはこのフィルムを持参していただき、ガンジス河をジェットボートで遡上し、源流の山に登るというユニークなアドベンチャーを楽しませていただいた。

総裁を辞められてからもIMFの長老として登山界の育成を見守り続け、また、障害を持つ人々への社会奉仕活動に情熱を注がれていた。しかし高齢と共に体の衰えは隠せなかった。1991年にご自宅を訪れた折りには奥様と一匹のネコと共に暮らされていて寂しげではあった。HAJは登るだけではない広い活動を進めてはどうかとアドバイスを受けたことが思い出される。また、ナンダ・カートの遭難の折りには氏が全力をあげてサポートしてくれた。

サリーンさんが辞められてからのインド登山界には何か、年毎に老いを感じてきた。IMFにも草創期のような覇気がどうも感じられなくなってきた。今、登山界内部には改革の芽も見られるが若い登山者の顔は以前として見えてこない。サリーンさんの遺志を受け継ぐ発展を祈りたい。

ギャ初登頂に意義あり

ヒマラヤン・ジャーナル編集部

中印国境上で、なおかつヒマチャル・プラデシュ州（H. P）とジャム&カシミール州の州境、云わば四方境上に位置しているのが、ギャ（Gya 6,794m）である。未踏を誇っているギャは、古くからその名を知られている割には実体がかめず、二転三転の後、H. P州第二の高峰である事が判明したのも、つい最近の事であった。因に、1992年のH A J / I T B P女性合同隊の当初の目標はこのギャであったが、予想される過度の登攀の困難さとアプローチの悪さから、計画段階で断念した経緯がある。

1995年夏、この山の初登頂に成功した、と発表した登山隊がいた。しかし、この初登頂は当初から疑問視されていた。この度「ヒマラヤン・ジャーナル」編集長でもあり、自らギャの偵察～試登をしているハリシュ・カパディア氏が、この疑問を解明した。

以下はその報告並びギャの登山を試みた隊の記録である。

ギャに初めて遠征隊が向かったのは、1983年の事である。ハリシュ・カパディア率いるこの隊は、ギャの位置の把握と登山の可能性を探るのが目的だった。彼らはリンティ谷下部及びギャ周辺の地域を踏査したが、何分正確な地図が無かった為、ピークに近づく事はできなかった。1987年、ハリシュ・カパディア、ムスリム・コントラクター、ディーレン・トールシディアスの3名が、ギャガー稜線上のコルに到達。ギャの鮮明な姿を撮影し、基部へのアプローチを探った。さらに、数ピークの登頂も達成した。1988年には、ディーレン・パニア率いる隊が入域し、ギャガー（6,400m）初登頂に成功している。

ギャへの本格的アタックの口火は、1994年7月、ヨウスフ・ザヒーア隊（デリー登山家チーム）によって切られた。この隊は、北のチュマー側から入山、ギャの北東稜上のコルに達する顕著な岩場のルートを選んだが、失敗に終わった。1996年夏、同隊は再び同じ北側のルートからアタックを試みたが、またしても登頂する事はできなかった。この間、1996年4月に、アルン・サマント率いるボンベイ隊が、リンティ谷及びチャクサチャン・ルンパからアプローチした。その時期、川の水量が

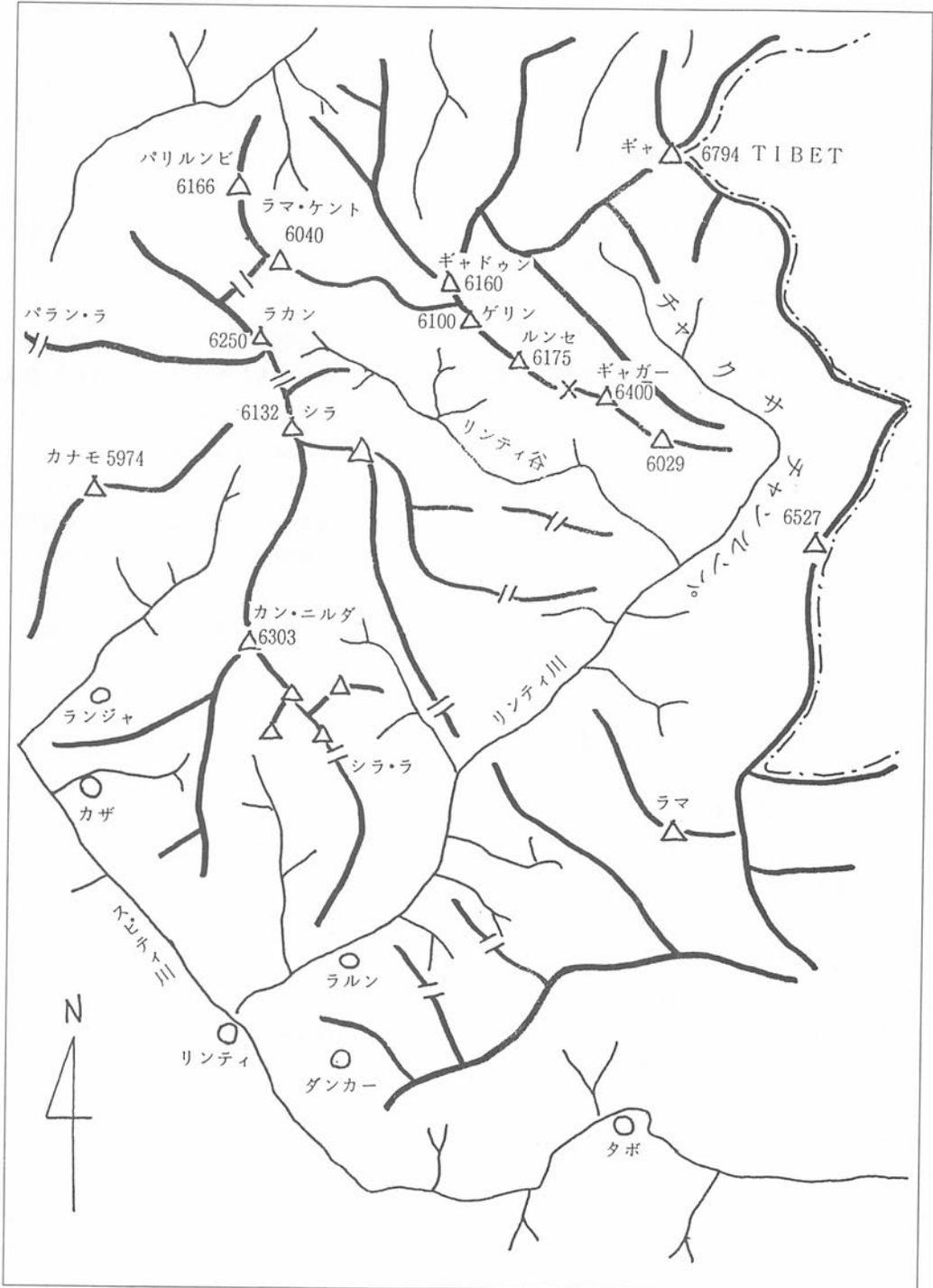
少ない為、このルートを取る事ができた。隊はギャの基部に到達し、かなり高い所までルートを延ばしたが、頂には至らなかった。1995年9月、ディロン中佐率いるヘリ突撃隊がギャの偵察を行い、アタックを試みた。（編集部）

ドグラ連隊の遠征

1995年の8月から9月にかけて、ハリバル・シン・ディロン中佐率いるドグラ連隊による遠征隊がアタックをかけ、「8月28日、ギャの初登頂に成功」と発表した。ギャは、ヒマチャル・プラデシュ州で2番目に高いピークで、インドとチベットの国境上に位置している。この遠征隊の報告書や記事、写真を検証すると、彼らの初登頂が疑わしいという結論に達する。

ギャは、南のスピティ地方、北のラダック地方、そして東のチベットを分ける境界上にある。このピークは、これまで次の様に評されてきた。「スピティ（リンティ谷）、ラダック（ルプシュ）、そしてチベット（パレ・チュー）の三地域が交わる位置に、巨大な一枚岩が天高く聳えるような山容のピーク、ギャがある。基部までは、長く困難なアプローチが続く。果敢な挑戦者達にとって、こ

▼リンティ谷周辺概念図



の未踏の大岩壁は魅力的な課題であろう」1996年春に試登したアルン・サマントは、「この大岩峰は、谷底からその頂まで1,200mの標高差がある」と語っている。ディロン中佐の報告は、これらの評と対照的で、「ギャは、高度な登攀技術はさ程

要さない岩峰である。その頂上は、テーブルの上の様にほぼ平である」となっている。ディロン中佐の“ギャ”が、登攀要素の面でも山容の面でも実際のギャとは異なったものである事は、彼自身の報告が物語っている。

5月中旬を過ぎると、リンティ谷及びチャクサチャン・ルンパをアプローチ・ルートに取るのは不可能になる。水量の増した川が、急峻なゴルジュの間を50km以上流れ続けるからだ。ドグラ連隊は当初、隊長によってこのルートからのアプローチが計画されていたが、前述の状況の為にリンティ谷に沿って進む事はできなかった。ピブックでリンティ谷を対岸に渡った後、隊はチャクサチャン・ラ(5,300m)まで登り、そこに前進キャンプを設けた。そこから北側へ1,000m程下り、リンティ谷が北東から南東に向きを変える地点に達した(4,200~4,300m)。再び川を横切った隊は、支谷に入ってそこに最終キャンプ(C2)を設けた。その翌日、彼らはひとつのピークに登頂した。彼らの報告では、そのピークがギャという事になっている。

地図を見ると、チャクサチャン・ラの北側の谷は直接ギャまでつながっていない。ギャは、その谷から19km北にあり、間には別の山稜が走っている。彼らがギャに登頂したとしている1995年8月28日、実はギャから離れた場所にいた事になる。隊長は、C2から頂上まで3.2kmの距離だったと説明している。

隊長は、詳しい報告書を作成し、又、キャプション付の多くの写真やスライドも公表した。彼らが撮影した“ギャ”の写真は、今まで報告されてきた山容とは一致しない。さらに、登頂の証となる頂上の写真は一枚も無い。

隊が公表した資料や他隊の報告を元に検証すると、ドグラ連隊がギャ以外の山に登頂した事は明白である。1995年8月26日から28日にかけて彼らが行動していたのは、ギャの南方12~19km離れた所の、ギャガー(6,400m)南側の支谷だった—これは、この隊の写真と同じ地域で遠征を行った他隊の写真を見比べればすぐに分かる。

ギャガー(6,400m)とギャ(6,794m)の間には高い山稜が走っている。彼らが登頂したという日、この高い山稜を報告書に記されている時間内で横断するのは、まず無理であるし、事実、報告書の中には、その様な超人的トラバースをしたという記録はない。隊長は、C2から頂上まで約3.2kmだったとしている。登頂日に片道17kmの横断を

したという証言はなく、アタック隊員達は、同じ谷をずっと辿ってそこから頂上へ続く稜に登った事になっている。

最後に隊長が公表したのは、ギャとギャガー両ピークが写っている写真だった。隊長は、登頂ルートやキャンプの位置を、ギャガーの上に記している。さらに、隊長が報告の中で描写している山は、ギャガーの方に当てはまる。「高度な登攀技術はさ程要さない」「テーブルの上の様に平らな頂上」等々。

インド登山財団(IMF)及び陸軍探検局は、ドグラ連隊が発表したギャ(6,794m)登頂の中に疑問点がある事を認めた。

軍の遠征隊は、様々な条件に恵まれている。多くの情報、ヘリコプターでのアプローチ、広大な範囲を網羅する数々の測量図、そして専門的な登山技術の訓練等。そのような隊が山の同定を誤ったのは、残念な事である。山岳界の支援者や権威ある人達は、登山家達が彼らの登山活動の中において常に正確かつ正直であろうと努力する事に、登山家としての誇りを認めている。過ちは、相応の段階を経ながら正していかなければならない。

登山というスポーツにおいて、最も信ずべきものは、登山家自身の言葉である。この事はごく前に考えられている。故に登山家は、自身の行動を裏付ける確かな証拠を提供する責任がある。登頂に関する写真や記述、特に初登頂を報告する場合は、その中身が重要になる。頂からの写真、頂までのルート上で撮った写真。それから、各キャンプでの写真には、標高や距離、所要時間等のデータが添えられなければならない。そして山の全容が入った写真には、山の上にルート・各キャンプの位置が正確に記されていなければならない。記録文には、真実と客観性が要求される。「事実を正確に伝える—これが遠征報告書の土台である」事は、何度言っても言い過ぎにはならない。

(ジャグディッシュ・ナナヴァンティ)



次のページの写真は、ハリシュ・カパディアがルート確認の為にディロン中佐へ送ったもので、中佐から送り返されてきた写真には、上の様なルー

▼ギャガー (6,400m中央) とギャ (6,794m右奥の黒いピラミッド)



トが記されている。

“ギャ”は、写真の右側にはっきり写っているにもかかわらず、隊長は、“ギャガー”の上に登山ルートを記してきた。黒々とした岩峰ギャと、雪に被われたドーム状の“ギャガー”は見間違えようがない。有能な隊長としての資質を持った人が、ギャの登頂を公表するとしたら、ギャとギャガーを混合する事などまずしないであろうし、過去の報告とはかけ離れた山容——雪に被われた平らなピーク——の写真にキャンプ・サイトやルートを印す事はないだろう。

この隊は雪に被われたドーム状ピークをギャを取り違えて登った、これが事実である。隊長がルートを記入したこの写真が、何よりの証拠である。(IMFは、この検証報告を基に、ドグラ隊の初登頂を否認する事になった。—編集部)

ギャ遠征：1996年4月

我々(ダナンジャイ・インガルカル、ディレン・パニア、L.O.、そして私アルン・サマント)は、雪に閉ざされたリンティ谷を遡る為、1996年4月3日、スピティ川河岸に降り立った。6頭のヤクを雇って入谷し、ラルン村(3,600m)に到着。激しい降雪の為、そこで4日間停滞した。ポーターは当初14名雇う予定だったが、8名しか集まらな

かった。部分的に凍結したリンティ谷を進んでいったが、1日に稼ぐ距離はせいぜい6~7kmというところだった。ポーター不足の為、装備・食料は減らさなければならなかった。谷を歩き出して4日目、プヒプフックより5km先にたどり着いた所で、ポーター達は帰ってしまった。そこはベース・キャンプ予定地の22km手前の地点だった。4月24日、ようやく我々全員はベース・キャンプ地(4,840m)に着いた。リンティのロードヘッドを出発してから19日、50kmのトレッキングは終わった。

ルートに選んだのは、チャクサチャン氷河の上部、ギャ(6,794m)の南南西支稜の東壁で、東壁沿いに1,000m高度を上げた。C1(5,300m)は氷河舌端、C2(5,750m)は東壁基部に設けた。C2からは、雪に被われた急なガリーを6,350mまで登った。途中、2ヶ所に40mロープをフィックスしたが、あとはフリーで登る事ができた。この工作を行った翌日は、12時間吹雪続け、停滞を余儀無くされた。5月2日、天気が安定したと判断し、バサン、ダナンジャイ、プラカシュと私はC3を目指し、スノー・ガリーに取り付いた。ところが、昼過ぎ、丁度最初のフィックス・ロープにさしかかった頃から、天候が崩れ出した。C2~C3の中間点だった。さらに悪い事に、フィックスロープ最上部のアイス・スクリュウが抜け、

▼ヒマチャル・ブラデシュ州第二の高峰ギャ (Gya : 6,794 m)



アルンとパサンが短い距離ではあったが滑落して
しまった。アルンは無事だったが、パサンは腰の
痛みを訴えた。我々はC2に下る事にした。C
2にはもう食料のストックが無かったので、我々
はアタックを断念し、重い足取りで山を下った。

(アルン・サマント)

ギャ遠征：1996年8月

目は飛び出んばかりに見開かれ、赤らんだ顔中
汗が吹き出している——普段は決して見せないよ
うなそんな表情をしながら、チャマンとキシェン
は、生まれて初めてのフライトに耐えていた。彼

ら2人を含む我々一行は、ギャ峰遠征の為にラダッ
クへ向かっていた。

それから数日後、隊の何人かは空の旅でチャ
マンとキシェンが見せたのと同じ表情を浮かべなが
ら、氷河のモレーンの上を歩荷していた。ギャの
北西壁の基部にキャンプを設けた後、絶壁を横切
るようにロープをフィックスした。ここで隊荷を
運ぶ時は、“空の旅”の表情に恐怖と不安の色が加
わり、我々の顔付きはさらに豊かなものとなった。

壁には3名が取り付いた。これが2度目の挑戦
となるヨウスフと私、そして頼りになるパートナ
ーのヴィクラムである。残りのメンバーは、1,000

フィート下の氷河上のキャンプにいた。その中には、前回ですっかりギャに精通したガネーヴェ、遠征参加は今回が初めてのアルヴィンド、ロック・クライマーであり人類学者でもあるアルカがいた。今回のアプローチは、1994年の経験があったので、わりと楽だった。前回のテント・サイトの跡やケルンは残っていた。我々はピラミット型の岩壁の右稜にルートを取る計画を立てていたので、その取付点にテントを張った。しかし、間近に見るとかなり急な稜で、これを限られた日数で登り切るのはとても無理、という結論に達した。そして、左稜へのルート変更を決定した。右稜から左稜へはたった数百mの距離なのだが、翼の無い我々にとっては、延々に続く恐怖の垂壁トラバースを意味していた。

我々はスパイのような足取りで、厚い岩棚を拾いながら進んだ。ヨウスフが終始トップに立った。200mに及ぶフィックスを張り、急な氷の斜面にある三角形の窪みに達した。その後は、毎日毎日、前日張ったロープの先端まで行き、少しずつルートを前に伸ばしては再びキャンプに引き返す事の繰り返しだった。標高6,000mでの夕食の時は、下方のキャンプと交信し、手短かなおしゃべりを楽しんだ。或る日には、ガネーヴェとアルカが我々のキャンプまで登ってきて、元気づけてくれた。

6日間、我々はまるでギリシャ神話のシシュポスの様に、終わり無き苦行を強いられた。1日中トライしても全く高度が稼げず、同じ場所に戻った。

上がりっ放しのアドレナリン、方向を失ったミサイルに見えるピトン、気違い染みた登攀と熱が、長い待ち時間に見せつける白昼夢——極限のトラバースによって、我々はこれらの異常な体験を味わった。

6日目の午後、我々はいよいよ左稜に達した。陽光に照らし出されたスラブは急傾斜だが、超人的トラバースを為し遂げた我々にとっては易しそうに見えた。しかしすぐに、問題に気付いた。表面には、アンカーが打ち込めるクラックやリスが全く見当たらない。そして我々は、そういう場合に無くてはならないボルトとドリルを持っていない。

我は選択を迫られた。プロテクション無しで、このまま未登の垂壁を600m登るか、それとも中止するか。前者はすなわち、栄光への近道であり同時に氷河をさまよう靈魂の群れへの仲間入りを意味し、後者はシシュポスの一団となって出直すという事を意味した。

以上が我々の報告である。

(パラムジット・シン)

(ヒマラヤンクラブ、ニュースレター50周年特別号より抜粋 訳出：菅原 愛里)

ニンチン・カンサ募集

ラサから半日行程の所にヤムドク・ツォと呼ばれる大きくて美しい湖があります。その湖を見下ろすようにそびえているのが名峰ニンチン・カンサ(7,206m)です。

HAJの登山隊は全てガイド登山ではありません。自己責任を認識して登山隊を構成します。

記

1. 期間:1998年7月19日～8月25日(38日間)
2. 募集人員:10名程度
3. 負担金:80万円
4. 切り:定員になり次第
5. 申し込み:HAJ事務局まで

ヌン(7,135m)募集

インド・ヒマラヤのサマーキャンプとして、1998年夏もカシュミール・ヒマラヤで開催します。カシュミールの盟主ヌンの高峰登山とラダックの素晴らしい雲上のヒマラヤの旅が楽しめます。

記

1. 期間:1988年7月19日～8月23日(36日間)
2. 隊員:10名
3. 費用:75万円
4. 切り:定員になり次第
5. 申し込み:HAJ事務局まで

シプトン・ティルマン縁の峠に挑む

ハリシュ・カパディア率いるガルワール・トラバース隊がこの春、1934年エリック・シプトンとビル・ティルマンが越えたと言われている峠を確認すべく、パンパティア・コル(5,250m)とミーズ・チャウカンバ・コル(6,000m)越えを計画している。

ヒンズー教の神話では、ケダルナート谷には高い峠を越えて1日でバドリナート寺院に参拝する聖者がいたと云う。地理的条件からすると、これが事実だとしたら登山上でも途方もない偉業である。1934年、エリック・シプトンとビル・ティルマンは果たしてこの峠越えが確実にできるものかどうかを確認すべく踏査をしたが、惨憺たる結果となった。

一方で、二人はアラクナンダ〜ガンゴトリの分水線を越えた。ただし、件の峠を越えてはいない。

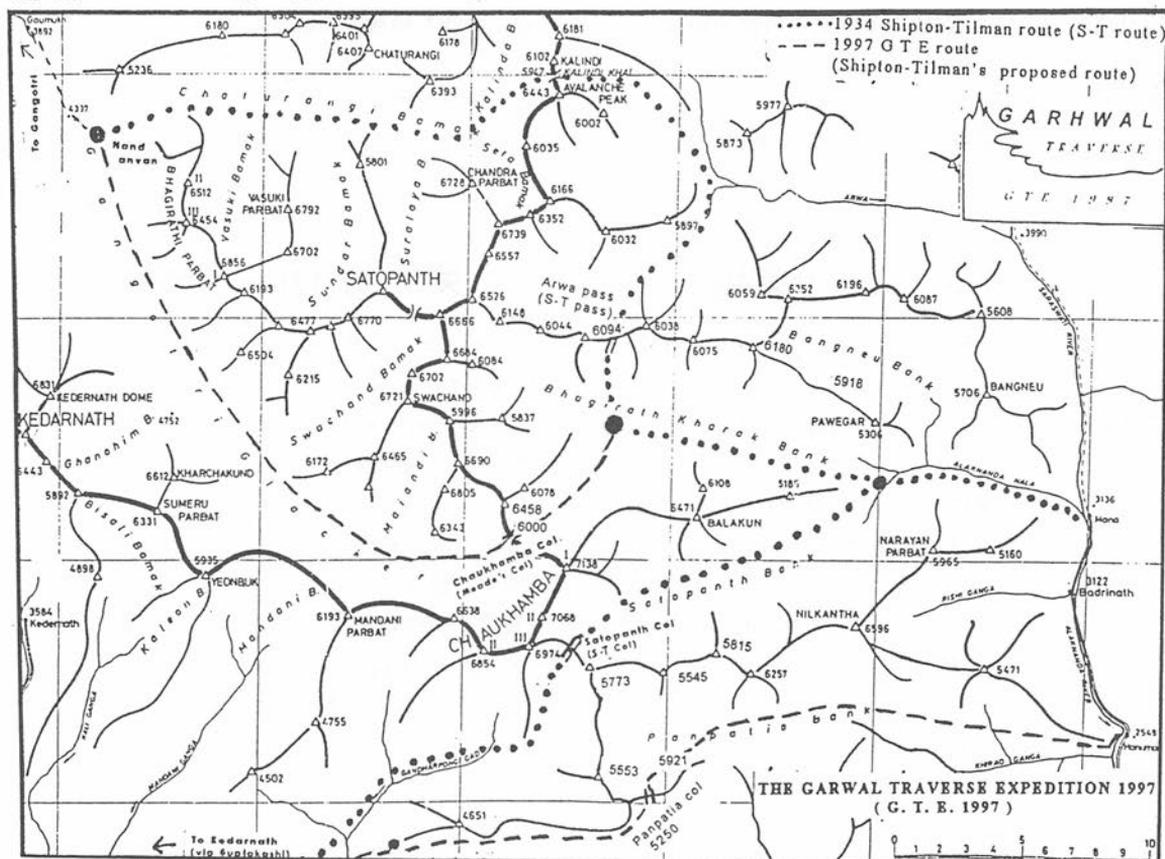
カパディア隊は、一つには、バドリナートからパンパティア氷河を廻り、パンパティア・コルを越え、マインガーラ谷を経由してケダルナート谷

のグプタ・カルまでの踏査を予定している。パンパディア・コルからは、2人が越えた峠が見渡せるはずである。

また、もう一つは、再びバドリナートからバギリラティ・カラク氷河を廻り、チャウカンバI峰の肩に当たるミーズ・チャウカンバ・コルを越え、ガンゴトリ氷河を下降しガンゴトリ寺院まで辿り着こうというものである。なお、このコルには、その名を付せられているミードが1912年に到達した以降、アラクナンダ側から到達した記録は見当たらない。

シプトンとティルマンは、聖者の巡礼をしたとされている峠を越えるべく、数人のポーターを従えてサトパント氷河からガンゴトリ・ガドに下降を試みたが、上部は急峻な氷壁、下部では森林帯で熊の出没に悩まされた。

カパディア隊(隊長以下5名)は5月下旬にはこの踏査に出発すると云う。そのレポートが楽しみである。



地域ニュース

《中国》

新疆でまた暴動

4月27日の香港紙・明報によると、新疆ウイグル自治区伊寧市で24日、今年2月に置きたウイグル族暴動の公開裁判が開かれた直後、約千人のウイグル族青年が路上で死刑判決に抗議して武装警察と衝突、警察側が発砲し、少なくとも2名が死亡、7名が負傷した。

現地の消息筋の情報として伝えたところによると、24日、同市の裁判所が競技場に5千人の傍聴人を集めて3人に死刑、27人に無期から懲役7年の実刑判決を下した。その後、被告たちの乗った護送車を青年達が取り巻き、車ごと奪おうとした。

数百人の警察が空に向けて威嚇発砲したが、群衆が動かなかつたため、民衆に向けて小銃などを乱射した。1人は現場で射殺され、もう1人は病院で死亡が確認されたという。（朝日新聞）

ミニヤコンカに登頂

ミニヤコンカ（7,556m）を目指していた札幌山岳会隊（芳賀正志隊長以下7名）が、北西稜から登頂した。日本隊による同峰の登頂は初めてである。登頂したのは横山英雄（55）隊員と長原孝友（29）隊員の2名。

同隊は3月30日にBC（4,100m）を建設後、天候に恵まれ、5月2日C5（7,000m）からアタックし、12時50分（日本時間13時50分）登頂に成功した。

リズム初登頂

中ネ国境上のリズム（7,050m）を目指していた労山登山学校隊（近藤和美隊長以下7名）が、同峰の初登頂に成功した。

同隊は4月28日シシャパンマBCに入り、5月5日にC1（5,800m）、8日にC2（6,400m）と移動し、10日11時50分近藤隊長（55）以下上野幸人（43）、三上誠（21）両隊員とHAPのミン

マ・ヌル（27）が登頂した。翌11日には近藤隊長が、前日頂上直下で断念した蒔苗政義（55）隊員と共に再度登頂した。

クーラカンリⅡ断念

クーラカンリⅡ峰（7,418m）の初登頂を目指していたHAJ／チベット合同登山隊（隊長：山森欣一、多吉甫）は、登頂を断念した。

同隊は4月5日ザーリ村にBC（4,250m）を設営。13日ABC（5,400m）、17日C1（5,900m）とルートを伸ばしたがクレヴァスに阻まれ、5月2日6,350mにて断念した。

チョムカンリに登頂

チョムカンリ（7,048m）を目指していた中央大学隊が登頂に成功した。詳細は不明。

《ネパール》

アイランド・ピークで行方不明

静岡勤労者山岳会に入った連絡によると、アイランド・ピーク（6,169m）に単独登頂を目指していた石井初男さん（35）が、行方不明になった。

石井さんは4月9日に日本を出発、同26日に標高約5,700mの地点から頂上に向かった後、連絡が途絶えたという。

柳瀬友彦氏日本大使に

外務省は、ネパール国特命全権大使として柳瀬友彦氏を任命した。柳瀬氏は昨年任期を終えた吉田重信氏の後任として、4月初旬、第11代目の大使となった。

柳瀬氏は、在広州日本国総領事の経験もあり、中国通として知られている。

テンジン・ノルゲイの孫が登頂

1953年エドモンド・ヒラリーと共にエヴェレストに初登頂したテンジン・ノルゲイ（故人）の孫のタシ・テンジン（32）が、5月23日エヴェレストに登頂した。祖父と孫が登頂者となったのは、初のケースである。

なお、この日ネパール側からエヴェレストの頂上に立ったのは、23人に及んだ。（東京新聞）

《インド》

印パ、ホットライン設置

インドのグジュラル首相とパキスタンのシャリフ首相は5月12日、モルディブのクルンバ島で約1時間半会談した。首相同志の会談は1993年4月のラオ、シャリフ会談以来約4年ぶり。両首脳は公式対話の継続を再確認するとともに、緊急時に直接対話できる「ホットライン」や、両国間のあらゆる懸案を討議するためのワーキンググループの設置で合意した。

シャリフ首相は会談後「有意義で建設的な話し合いだった」と語った。また「個人的な友好関係を築いた」と述べ、隣に立つグジュラル首相の肩を軽くたたいて2人の親密ぶりをアピールした。グジュラル首相はワーキンググループを5月末に開催することを明らかにした。今年3月の外務次官協議で約3年ぶりに再開した両国間の公式協議が軌道に乗ることが確実になった。

会談に先立つ南アジア地域協力連合首脳会議でシャリフ首相は、「緊張、軍事対立、軍事費の膨脹を続ける余力は我々にはない」とし、両国の関係改善が二国間だけでなく、連合全体の経済協力促進につながるとの認識を示した。グジュラル首相は印パ首脳会談を「両国間の新たな歴史の幕開け」と位置付けた。

ただ、両国間の最大の懸案であるカシミールの帰属問題では双方の主張を述べるに止まった様子。インドは同問題を二国間で解決すべきだと主張しつつ、まず貿易など経済協力を優先したいという立場だ。一方、パキスタンは同帰属問題を住民投票で決するべきであり、第三国の仲介を受け入れる姿勢を見せ、同問題の解決を最優先課題としている。90年以降だけでも、双方で計2万人以上の犠牲者を出しているだけに、カシミール問題は簡単に決着しない、との観測が多い。（日経新聞）

※カシミール問題

1947年にインド・パキスタンが分離独立して以来、両国はカシミールの帰属を巡って争ってきた。47年の第一次印パ戦争後、国連の安全保障理事会決議により停戦ラインを境界として両国の暫定的な分割領有が決まったが、パキスタンは全域の帰属を改めて話し合うよう主張。停戦ラインのインド側地域を実効支配するインドは協議の対象とすることをこれまで拒否し、昨年のインド総選挙でもインド側で投票を実施した。（日経新聞）

インド・ヒマラヤ登山手続続報

4月下旬のIMFからの通達によれば、今春のインドヒマラヤ会議席上で説明のあった新規則発表以降、若干の修正・変更がある。実施時期は1997年11月1日からとの事であるが、念のためここに記しておく。

1. 環境保護費のデポジットについて

現在実施中の一隊につき千ドルのデポジットは不要となる。

2. 環境税徴収について

一隊につき3百ドルの環境税を4百ドルに変更する。その代わりに、上記の環境保護費徴収を中止する。

3. 連絡官による登山隊の環境保護証明は不要である。登山隊自身で環境保護やゴミ問題に留意する事。

4. トランシーバーについて

IMFで今年4月からトランシーバーの貸し出しをする。この場合、これまでの様にわずらわしい手続は不要となる。レンタル料金等は下記の通り。

a. 4台1日～4週間まで：1台につき1週間当たり50ドル。

b. 4週間もしくは4台を超える場合、1台あたり10ドルの追加料金となる。

c. 保証供託金：1台当たり450ドル。

5. これまで受け付けなかった単独登山も許可する。

6. 連絡官の装備はIMFで貸し出す事も可能である。その場合の費用は700ドルとなる。

7. 3ドルで以下の地図を供給する。

- a. Garhwal Himalaya—OST 1/15万
 b. " —WEST 1/15万
 c. Sikkim Himalaya 1/15万
 d. Karakoram 1/60万
 e. Indian Himalaya—Jammu & Kashmir
 (Leh, Zaskar & Nubra Valley)
 f. —Do—
 (Kargil, Zaskar & Nun Kun area)
 g. Himachal Pradesh
 (Kalpa-Kinnaur, Spili & Shimla)
 h. —Do—
 (Kullu Valley, Parbati Valley & central Lahaul)
 i. Kumaon-Garhwal
 (Pindari glacier, Badrinath & Nanda Devi area)
 j. Karakoram
 (Siachen, Rimo, Saser Kangri area)
 ※ e～j の縮尺は1/20万
 k. Trekking map of Himachal Pradesh
 l. " Kumaon Himalayas
 m. " Gangotri & Yamnotri
 n. " Ladakh
 o. Shyok (contour)
 p. TSO Morari (contour)
 q. Kargil (contour)
 r. Pangong TSO (contour)
 ※ o～r の縮尺は1/25万

《アフガニスタン》

仏教遺跡の大仏、爆破予告

アフガニスタンから伝えられた報道によれば、イスラム原理主義勢力のタリバーンの前線司令官は、バーミヤンまで進軍したら「同地にある大仏は、偶像崇拜を禁ずるイスラム法に反したものであり、ダイナマイトで爆破する」と公言した。大仏はユネスコが保存計画に乗り出しているシルクロードの世界的文化遺産だ。タリバーンに対して国連などがよ程強い圧力を加えない限り、爆破される可能性も強く、貴重な文化財は消滅の瀬戸際

に立っている。

バーミヤンの大仏は高さ55mと38mの2つがある他、周辺には無数の僧坊などが残っている。いずれも6世紀から9世紀にかけて建造されたと考えられ、中国の敦煌や雲崗ともつながる仏教遺跡で、唐僧玄奘も「大唐西域記」に当時まだ黄金に塗られて輝いていた頃の大仏の荘厳さを記している。

インフォメーション

藤江画伯の画展開かる

当協会古参会員の藤江幾太郎氏の画展が、下記の通り行なわれる。第42回を数える今回の画展には、ネパール及び国内の山と旅で描かれた新作20点が掲げられる。

- 期間 7月1日(火)～7日(月)
 11時～18時30分(日曜日並びに最終日は17時まで)
 ■場所 朝日アートギャラリー ☎03-3535-7740
 JR有楽町駅又は地下鉄丸の内線銀座座
 (C4番出口)下車
 朝日旅行センター隣

トピックス

最高峰の標高

「私の登ったエヴェレストは8,850mだったかもしれない」、登山家で山岳旅行コンサルタントの貫田宗男さんは、日本のいくつかのエヴェレスト登山隊の登頂写真を見て疑問を持った。

1993年12月の群馬隊の頂上写真には、金属のポールが立ち、雪面から約50cmの所にオレンジ色の測量用器具が付いている。翌年5月の愛知学院大隊の写真だと、同じ器具が雪面から1m位上に見える。

同年10月、貫田さんが登頂した時、頂上はずきりした雪面で、なにもなかった。その時は、風で吹き飛ばされた位に思って気に留めなかった。

ところが、翌95年5月の日大隊の写真には、驚いたことに、またオレンジ色の器具がくっきりと写り、雪面から約1m突き出していた。

なぜ貫田さんが登頂した時、ポールがなかったのか。夏のモンスーン期に雪が積り、ポールが埋まってしまったからだろう、というのが結論だ。

冬の間には雪が風で吹き飛ばされ、春にはポールが姿を現す。山頂の標高は、春の雪面の高さらしい。92年春の米国隊の測量によると8,848.82mだそうである。(5月8日朝日新聞「窓」)

ディームベルガー、カパディア両氏 英国山岳会名誉会員に

この度、クルト・ディームベルガー、ハリシュ・カパディアの両氏がイギリス山岳会の名誉会員に選ばれた。

世界最高峰から

昨年春のエベレストでの遭難事故は、日本人女性として2人目の最高峰登頂者となった難波康子さんが犠牲者の一人であったこともあり、日本でも大きく報じられた。けれども、大きく取り上げられた最大の理由は、遭難の様子が衛星回線で母国に実況され、さらにインターネットを通じて多くの人々が見ることが出来た為であろう。

今年も世界最高峰への登山の様子を3つの隊の(何れもネパール側)ホームページから知ることが出来る。それによると、サウス・コルルートからは早々にインドネシア隊が4月26日に成功。5月20日には南壁からアイスランド隊が登頂した(隊員4名シェルパ3名)。23日は登頂ラッシュとなり、22日夜40名以上がサウスコルを出発。30人が登頂に成功した。中でもP.エイザンス(米)は5度目の登頂となった。25日にもまた隊員1名とシェルパが登頂した。中国側では既にカザフ隊3名、ドイツ1名、シェルパ1名、計5名の死亡・行方不明者を出している。ネパール側ではシェルパ1名が転落死亡。尚、カザフ隊のルートは北壁となっている。同隊からは5月20日にも7名が登頂している模様。中国側の情報は、昨年来日したラッセル・ブライス氏が中国側から無線でネパール側に連絡をしている。尚、南東稜ルートを目指した日本のノエビア隊は既に断念している。エベレストのお隣のローツェではA.ヒンクス(英)

が自身10座目の8千m峰の登頂に成功後、すぐさまヘリコプターでマカルーに向かったという。

(インターネットから)

自立めざす「路上の子」—ネパール—

世界に3千万人から1億人(ユニセフ推計)といわれるストリートチルドレン(路上生活の子供たち)。1,600人~1,800人がいるカトマンズに2月、ストリートチルドレンの初の組織「子供連合」が発足した。代表は、自分もかつて同じ境遇だった16歳の少年、クマール・スッパ君。インド、セネガル、ブラジル、ペルーにも既に子供たちによる自立組織があるが、南西アジアで「最も所得の低い国」での活動ぶりが、彼等を支援する非政府組織(NGO)関係者の間で注目を集めている。スッパ君らによる自助努力への期待は大きい。

目下の会員は16歳までの15人。自立の手助けと組織化、そして学習が活動の中心だ。会員1人当たり月15ルピーの共同貯金もしている。

彼等は路地にたむろする子供たちを、児童労働やストリートチルドレン問題に10年前から取り組んでいるネパールの非政府組織「Child Worker in Nepal-CWIN」が運営する「共同の家」に連れて行く。スッパ君たちは子供たちにポストカードの絵を描くよう勧める。毎日会っているうちに、他人を信用しなくなっていた子供たちが少しずつ心を開き、仲間意識を抱いてくる。描いた絵はキャンペーン用にCWINが買い上げてくれる。

CWINがこれまでに収容した子供たちは10年で約1,700人に及ぶ。

ヒマラヤから

クーラカンリII便り

4月2日、ABCへのルートを探察がてら隊員6人が丘を登ってみると、ドブジ隊長の言うABCは神戸大学のI峰のキャンプ地で、我々のABCには更に幾つもの丘を越えなければならず、問題外でした。結局、小学校の裏の丘を越えた所にBCを作りました。その先に氷河湖がある、と云

うのですが、私はすっかりモンダのことと思い、承知しました。

4月3日、日本側と通訳は先に行け、と云うので、モンダまで約12kmの車道を歩きました。40分位して道端に小学校があり、ひょっとしたら件の小学校とはモンダの小学校ではなく、この小学校を指しているのではないかと疑問になり、宮崎と通訳を伝令に走らせたところ、やはり馬やチベット側は予定通りこの小学校の目の前にある丘を越えて行ったとの事。我々は引き返すことになりました。

4月4日、ドブジ隊長は馬を連れて上部へ向かい、日本側は停滞。19時過ぎ馬と隊長が帰り、荷の個数を確認しました。

4月5日、10時過ぎトラックでザーリに移動し、道端に3張の大型テントを張り、BCとしました。しかし、日本側の高所食の入った中プラパール2個と背負子1個が無いのが判明。中国側も卵300個や他の物が無くなっていました。

4月6日、休養と隊荷整理。

4月7日、8時35分、宮崎、太田とドブジェ、シャオチミが馬方と共にABCの偵察に一泊の予定で出発。他の日本側は目の前の丘に順応訓練に出掛けました。17時30分、宮崎、太田帰幕。チベット側は一泊して上部偵察との事。

4月8日、8時20分、日本側6人はABCまでの順応に出発、結局ABCに到着したのは千場、太田、吉田の3人でした。

4月9日、8時20分、樋上、千場、伊藤、吉田の4人はABCまで順応に出発。夜になって、我々の荷を盗んだ泥棒が6人捕まったとの事。

4月10日、荷の再梱包。1日中東の強風が吹き荒れました。

4月11日、8時から小雪。馬や馬方が来たもののチベット側は動かず帰りました。ロザの公安が来て、盗まれた品物のほとんどが還りました。

4月12日、チベット側は全く動かず休養。1日中穏やかな日。我々の荷を盗んだ曲措郷の書記がチンコー酒を持って謝りに来ました。

4月13日、待望のABC入り。馬19頭、ロバ1頭で日本側は8時58分、チベット側は9時25分出

発。絶好の移動日和でした。

4月14日、宮崎、太田、ガヤ、ジャツォがABCから5,800mまで到達。BCは風は強いが好日。

4月15日、日本側6人とドブジェ、シャオチミがC1予定地を往復(5,900m)。BCは時々小雪が舞いました。

4月16日、6人のポーターがC1へ荷上げ。樋上、千場、伊藤はC1往復。ジャツォは本日のポーターが弱いので新たなポーター手配のため、C1往復後一気にBCまで降りました。

4月17日、宮崎、太田、吉田C1入り。樋上らはABCで休養。ジャツォはABCへ戻りました。

4月18日、新旧ポーター12人でC1へ荷上げ。宮崎、太田、吉田はC2へ至る懸垂氷河基部まで到達。ガヤ、ドブジェ、シャオチミC1入り。樋上、千場、伊藤はC1を目指したものの伊藤不調のためABCへ引き返しました。

4月19日、宮崎、太田、吉田はガヤ、ドブジェ、シャオチミとC2へのルート工作。ロープを9本張り、6,150mへ到達しました。

4月20日、C1、ABC共悪天のため停滞。

4月21日、悪天のため停滞。

4月22日、ドピーカンとなるも、C1は雪崩の危険を危惧して停滞。ABCも停滞。

4月23日、C1の日本・チベット側ABCへ下山。ABCは停滞(ただしガヤ、ジャツォ、シャオチミはBCまで下山)。

4月24日、ドピーカンとなるも、ABCで日本側6人チベット側1人停滞。この日BCにラサから成天亮氏が激励に来てくれました。

以上思わぬ展開となりましたが4月26日以降、好天気を期待して全力を尽すつもりです。

(注：クーラカンリII隊の結果は12ページ参照)

1997.4.25扎日(ザーリ)のBCにて 山森欣一

ブロードピーク便り

前略、皆様方のお陰をもちまして、遠征隊は漸く日本を出発し、予定通りイスラマバードへ到着致しました。先発の4名が精力的に仕事を進めてくれていたため役所回り等も順調に進み、1日で終了できました。しかし、ここでひとつ問題が生

じました。5月14日はスカルドへの国内便へ搭便の予定でしたが、ここ数日、当地は天候が悪くスカルド便の不通が続いているため、仮に明日天候が回復しても我々までは搭乗の順番が回ってきそうにないということです。そこで仕方なく、急遽予定を変えて陸路でスカルドを目指すことになりました。スカルドまでは800km。途中チラスで1泊するバスの旅となります。ハイウェイとは名ばかりの悪路で、計20時間の拷問のような2日間となりそうです。

(静岡市岳連ブロードピーク登山隊 松永義夫)

日本山岳会新役員

平成9年度(株)日本山岳会の役員は、5月17日の通常総会で下記のように決定した。

- 会長：斎藤 惇生 (新任)
- 副会長：小倉 茂暉 (〃)
- 大森 薫雄 (〃)
- 竹内 哲夫 (〃)

30周年資金協力者ご芳名

10口(八木原園明、尾形好雄) 5口(小林英見、名塚秀二、佐藤光由) 3口(伊藤正毅、久保開次、中込清次郎、植竹清孝、古原和美) 2口(石川富康、田邊卓司、能勢真人、山中芳樹) 1口(原著、文蔵照雄、仕名野寛治、沖允人、石沢好文、中村保、中山裕朗、本多夏生、堀内弘和、中山健、薬師義美、柳稔、目黒孝道、村上泰賢、奥村豪、岡田伊佐男、小松達、安田一朗、田部井淳子、匿名2名)

東京集会のお知らせ

日時 6月30日(月) 午後7時～
 内容 クーラ・カンリII隊報告を行ないます。ご参加下さい。
 場所 HAJルーム(地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分) 又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

東京新聞の本

山の情報誌 岳人



毎月15日発売(日・祝日の場合は前日) 定価670円

■本誌の年間購読ご案内

本誌の購読は、全国の書店、東京新聞販売店、中日新聞販売店、北陸中日新聞販売店で承ります。

直接購読ご希望の方は、とじ込みの振替用紙に「岳人何月号」からとお書きのうえ、送り先郵便番号、住所、氏名を明記して、ご送金ください。

郵送料は通常号116円、特大号124円です。年間購読料は8,480円で送料は当社負担です。お求めの本誌に乱丁、落丁がありましたらお取り替えいたします。

97年	第1特集	特別企画
★1月号	日本の雪山大作戦	南米インカ・トレイルを行く
2月号	富士見十三州の山	春のフンザとバルト口氷河
★3月号	山スキー大滑降	ネパールの夢のトレッキング
4月号	アルプスの雪稜	初夏のロッキー特選コース
★5月号	花と森の山旅	中部の山岳会と奥美濃の山
★6月号	私の花の名山	創刊50年 世界のアルピニストたち
★7月号	今から間に合う海外の山	仙台のクラブ、東北の沢を行く
8月号	みちのくの山と沢	屋久島の緑深い峰々と人
9月号	修験の山は名山	山の達人と訪ねる秋の北海道
★10月号	紅葉の山、尾瀬と南会津	撮影クラブと秋の大峰山脈へ
11月号	晩秋、湯けむり紀行	フリークライミング天国・岡山
12月号	身を守る雪山技術	冬の奥秩父に生きる山人たち

(★は 特大号となります)

東京新聞出版局(中日新聞 東京本社) 〒108 東京都港区港南2-3-13 ☎(03)3740-2674 書店で発売中。中日新聞販売店でも取りつぎます。

1997年ブータンの祝日

期 日	祝 日	期 日	祝 日
1月 1日 (水)	冬至	9月 22日 (月)	雨乞い日
10日 (金)	献納日	* 10月 7日 (火)	ドゥルブチェン (ティンプー)
2月 8日 (土)	Fire Ox New Year (新年)	11日 (土)	ダサイン
~9日 (日)		* 11日 (土)	ツェチュ (ティンプー)
4月 17日 (木)	Shabdrung Kuchoe	* ~13日 (月)	
5月 2日 (金)	第三代国王誕生日	11月 11日 (火)	国王生誕祝賀会
22日 (木)	釈迦入滅日	~13日 (木)	
6月 2日 (月)	国王戴冠式	21日 (金)	釈迦降臨日
15日 (日)	リンポチェ誕生日	12月 17日 (水)	ナショナル・デー
7月 8日 (火)	釈迦初説法日		
15日 (火)	第三代国王命日		

(* は、該当地域の休日)

1997年ブータンのお祭り

日程は変更されることがある。

期 日	祭	地 域
2月 12日 (水) ~ 14日 (金)	ブナカ・ドムチェ	ブナカ
15日 (土)	ブナカ・セダ	ブナカ
3月 16日 (日) ~ 18日 (火)	ゴムコラ・ツェチュ	タシガン
19日 (水) ~ 23日 (日)	パロ・ツェチュ	パロ
4月 15日 (火) ~ 17日 (木)	チュカ・ツェチュ	チュカ
6月 13日 (金) ~ 15日 (日)	ニマルン・ツェチュ	ブムタン
15日 (日)	クジェラカン・ツェチュ	ブムタン
10月 9日 (木) ~ 11日 (土)	ウォンディフォダン・ツェチュ	ウォンディフォダン
11日 (土) ~ 13日 (月)	ティンプー・ツェチュ	ティンプー
	タムシンパーラ・チョパ	ブムタン
14日 (火) ~ 16日 (木)	ブラッカール・ツェチュ	ブムタン
14日 (火) ~ 18日 (土)	シャンベラカン・ドゥブ	ブムタン
15日 (水) ~ 17日 (金)	タンビ・マニ	ブムタン
12月 7日 (日) ~ 9日 (火)	モンガル・ツェチュ	モンガル
8日 (月)	タシガン・ツェチュ	タシガン

* ツェチュ：ゾンカでの“月の十日”の意味。8世紀にブータンに仏教を伝えたグル・パドマサンババの生涯の12の出来事は各月十日に起きたと云われ、寺院やゾンでは特定の月の十日に、年に一度の盛大な法要を行う。

* ドムチェ：ツェチュの様に仮面劇が行われる。

* セーダ：17世紀に初めてブータンを統一したシャブドゥン・ガワン・ナムゲルが、相次ぐチベットの攻撃を“ユニークな知恵”を使って撤退させた事に由来する。

* ドゥブ：燃え盛る炎を中を走り抜け、煩悩を焼き消してしまう“ミワン”と云う儀式で有名。

ゴミ処理費用の供託金制度

92年よりクーンブ・ヒマール・エリアにおいてゴミ処理費用の供託金制度が始まった。これはサガルマータを始め、プモ・リ、アマダブラムなどネパールの中でも人気の高い山々が多いこのエリアにおいての環境問題に起因し、ロイヤリティの大幅値上げ、員数、隊数期限などとともにクーンブ・エリアに限りこの制度が実施された。

実際供託金が回収できなかったという話は聞かないが、ある隊は上部キャンプに残した食糧を後から来た隊に告発され、供託金の一部が回収できなかったといった事例もある。又、BC付近は頻繁にチェックが行われている。

このエリアに入山する登山隊は以下の三つのカテゴリーに分かれたゴミをそれぞれ定められた方法で処理した場合に供託金を受け取ることができる。

1. クーンブ・エリアで焼却または腐敗還元できるゴミはBCから運びだし、当該の村(ナムチェバザールなど)の開発委員長、またはメンバー立ち会いのもと処理する。

(例) トイレット・ペーパー、ダンボール箱、紙くず・竹箆、マット、木綿やジュッタの袋、余剰食糧、死体

2. リサイクルすべき物はカトマンズまで持ち帰り再処理業者に渡す。

(例) 空き缶、空き瓶、プラスチックやアルミフォイルの袋やシート、プラスチックの樽、携帯用ガス・カートリッジ。

3. 再輸出(持ち帰り)するものは自国へ向けて発送した段階で処理終了とみなされる。

(例) 空の酸素ボンベ、使用済み電池、テントや個人装備などの登山用具。

* 供託金は以下の標高によって定められている。

サガルマータ	4000 \$
その他の8000m峰	3000 \$
8000m峰未満の山	2000 \$

それでは実際の手続きの流れを記してみよう。

1. ゴミの供託金の支払い。レシートを観光省に

提出。(ブリーフィングの前)

2. ナムチェ・バザールなどのSPCC (Sagarmata Pollution Control Communitie) のオフィスにて登山隊の持ち込み品目を銘記する。その際厳しいチェックは受けないが、あまりきっちりと申告すると帰路チェックの際面倒となる。

3. 帰路SPCCのオフィスにてチェックを受け必ず担当オフィサーのサインの入った書類をもらう事。尚、私はゴラクシェブにてEPIを売却してしまいトラブルとなった経験があるので、必ずナムチェ・バザールまで下ろすように。EPIガス、酸素ボンベ、電池、空き瓶、空き缶のチェックは厳しい。

4. カトマンズにて処理可能なゴミをゴミ処理業者に渡し、証明書を取得。

5. 日本へ再輸出。(送り状が必要) 但し日本から別送品がない場合は省略となる。

6. 上記3種類の証明書を観光省に提出して、観光省からのゴミ処理終了の証明書を取得する。

7. 観光省からの最終証明書を国立銀行に提出して、供託金を回収する。

尚、カトマンズにて供託金を回収するのに約1週間程掛かるため、日程にいれておいたほうがよい。又、日本隊の場合、外貨として米ドル、日本円が使用可能だが、国立銀行の口座が米ドルの為日本円は再換金手数料が別途必要となる。

隊荷の輸送とキャラバン

カトマンズにて準備が整えば、いよいよ出発となるが、キャラバン出発地まで陸路の利用と国内線を利用する方法がある。

まず始めに国内線について述べてみよう。

登山隊の荷物が多い場合は隊荷はあらかじめ陸路にて先送りしておくか、チャーター・フライトの利用となる。ここでは隊員及びネパール人スタッフや個人的な荷物のみ国内線利用の移動について述べてみる。

ネパールでは国内線の料金はネパール人料金と外国人の2通りがある。外国人料金は外貨支払いネパール人料金はルピーとなる。

ポカラやルクラなどエリアによっては1日に複数便のフライトがある。その場合フライトによっては全てが外国人料金となる場合もある。しかしネパール人も外国人料金を支払えば利用可能となる。

天候や機体の故障等航空会社の方のフライト・キャンセルの場合は100%が払戻となる、しかし払戻はネパール・ルピーとなる。

個人的な理由によるキャンセルの場合は下記のキャンセル・チャージが必要となる。

フライトの24時間前以上	10%
フライトの24時間前以内	33.33%
フライト後	100%

フライトを変更する場合は24時間前なら料金の10%で同じ路線のフライトに変更が可能である。但し、同じ航空会社のフライトへの変更のみとなる。

〈主な国内線のフライト片道料金〉

	外国人料金	ネパール人料金
KTM〜ルクラ	90 \$	25 \$
*KTM〜シャンボチェ	120 \$	50 \$
KTM〜ポカラ	63 \$	30 \$
ポカラ〜ジョムソン	50 \$	25 \$
KTM〜ジュムラ	127 \$	
KTM〜ネパールガンジ	99 \$	
KTM〜ジョムソン	111 \$	45 \$
KTM〜ツムリントール	44 \$	25 \$

*はヘリコプター

ネパールの国内線の航空機の機種は小さい。機内に持ち込める荷物も制限される。尚、一般的に預けられる荷物は手荷物もふくめ15kgまでとなる。基本的には重量オーバーは認められておらず、乗客が優先となる。しかし航空会社の判断やフライトの状況次第といえる。

重量オーバーの場合、平均1%／フライト料金／1kgのオーバー・チャージとなる。

当然ながら国内線ではEPI、LPGなどのガス類、石油、ガソリン等の危険物を預けることはできない。

又、カトマンズ〜ルクラ便のような山岳フライトは天候に左右される事が多い。空港自体もモンスーン期などはしばしば壊れてしまう事も多いので

必ずフライトの予備日を日程に組み込む必要がある。

尚、国内線を利用する隊はあらかじめ日程及びフライトの予約を現地エージェントなどを通して入れておこう。

ーチャーター飛行機及びヘリコプターー

山のエリアによっては、ネパールの道路事情やキャラバンの日数やポーター賃金などを考えると飛行機やヘリコプターなどのチャーター便を利用するのが有効な場合もある。例えばクーンブ・エリアならルクラ、シャンボチェ。カンチェンジュンガ・エリアではタプレジュン。マカルーやマナスルなどではBCまでヘリコプターが利用されている。

特にヘリコプターの普及は目まぐるしく今後さらに増えていく事だろう。

〈料金及び積載量〉

機種	料金(／1時間)	積載人数又は積載量
ツイン・オッター	1200 \$	16人 1250kg
大型ヘリコプター	2200 \$	22人 4000kg
小型ヘリコプター	1100 \$	3人 240kg

チャーターする場合事前に予約が必要となる。又地域によってはテスト・フライトが必要となり、その場合の料金も負担しなくてはいけない。

ーレスキュー・ヘリコプターについてー

登山隊は万が一の事故に備えレスキュー・ヘリコプターを使用する事となるが、その様な事故時に対しても、基本的に料金先払いとなるため、キャラバン出発前にエージェントにあらかじめデポジットマネーの支払いが必要となる。

料金はフライト終了後に実際のフライト時間を基に精算される。

フライト時間はカトマンズ出発から到着までの時間で計算される。

尚、フライトした場合は天候等の条件又はパイロットの判断から目的達成が出来ない場合でも料金は支払わなくてはならない。

ー陸路の利用についてー

最も格安で行くのならローカル・バスの利用であるが、隊荷などが多い隊は車をチャーターする事もできる。車種はバス、トラック、ミニ・バス、ランドローバー、乗用車等のチャーターが可能で

ある。

ネパールでは車検制度がなく整備が完全でないものが多い。そのため故障、事故なども時どき起きるので注意が必要。

又、道路事情もあまり良くないため土砂崩れ等による通行止めもある。特にモンスーン期などは注意が必要。

陸路による利点は、航空機利用などと違いEPIガス、石油等の危険物の輸送に対しあまりうるさくは無いため、輸送可能である。

〈主な地域へのチャータ料金〉

KTM～ポカラ	300 \$
KTM～ビレタンティ	550 \$
KTM～ジリ	500 \$
KTM～シャブルベンシ	350 \$
KTM～ベンシャル	500 \$
KTM～ダーラン／ヒレ	700 \$
KTM～コダリ	300 \$
KTM～フェディ	350 \$
KTM～ドゥムレ	300 \$
KTM～ドゥンチェ	300 \$

ーキャラバンについてー

麓の村に到着したら、いよいよキャラバンスタートである。ネパールではだいたい道路も伸び、ヘリコプターなどの普及などによりアプローチは多少短縮されたとはいえ、インド、パキスタン、チベットなどの山々と比べ、まだまだ長いキャラバンを強いられる。

キャラバンはローカル・ポーターを雇い進められるが、ポーターは比較的簡単に出発地で集める事が出来る。場所によってはヤク（高所牛）、ヤゾッキョ（ヤクと牛のかけ合わせ）、クーンブ・エリア）。ドンキー（アンアプルナ、ダウラギリ・エリア）などの利用が有効な場合もある。

ローカル・ポーターを利用する場合は、ナイケ（ローカル・ポーターの頭）を中心に進められる。尚、ナイケはポーターのまとめ役で、荷物は運ばない。

ローカル・ポーターには雪中、荷物を運ぶ場合以下の装備を支給する事となっている。

靴	1
毛布又はジャケット	1

毛のズボン	1
毛のシャツ	1
セーター	1
手袋	1

又、交渉で現金で支払う場合もあるが、標高の高い峠越えや雪中などの場合は、しっかりチェックをしておきたい。

荷物の重量は30kgを超えない事。

給料はキャラバン終了時に支払う事となるが、アドバンス・マネーを要求してくる事もある。

又、給料用の少額の紙幣をあらかじめカトマンズにて両替しておく必要がある。

事故時のローカル・ポーターの補償額は5000Rsである。保険を掛けておく事を薦める。

ヒマラヤの環境問題が叫ばれている現在、キャラバン中のポーターの燃料が問題となっている。特に薪の使用が禁止又は制限されているエリアが多いため、ポーター用の石油コンロ、石油の手配も必要となる。

ートレッキング・パーミッションー

登山隊は隊員各自のトレッキング・パーミッションが必要となる。ムスタン地域やマナスル、カンチェンジュンガ地域は他の地域に比べ割り高で申請書も変わる。又、国立公園内に含まれるエリアに入る隊は国立公園入域料の支払証明書が必要となる（650Rs）。結構頻繁にチェックを受けるため、すぐに出せる様用意しておくといよい。

おわりに

現在ヒマラヤ登山も多様化してきた。公募登山や小登山隊からイベント登山、いわゆるヒマラヤ登山が特別な人のもではなく、大衆化の時代といえる。それはある意味では喜ばしい事ではあるが、その反面登山隊が特定の山、ルートに集中してしまい、環境問題やヒマラヤ登山本来の面白さに欠けてしまっている感も拭えない。尚、ネパールにおいては登山料の大幅値上げを始め、レギュレーションが目まぐるしく変わっています。常にアンテナを張り巡らし手続きをおこなって下さい。

（文責 野沢井 歩）

日本ヒマラヤ協会サマーキャンプ

ニンチン・カンサ (7,206m) 登山計画

ごあいさつ

日本ヒマラヤ協会は、広くヒマラヤ地域の登山・踏査・自然科学・人文科学について研究・実践する、ヒマラヤ愛好者約800名で構成する全国組織の任意団体であります。本会は、1967年の創立以来インド、アフガニスタン、ネパール、旧ソ連、パキスタン、ブータン、中華人民共和国など広大なユーラシア大陸の山野を舞台として活動し、これまで登山・踏査だけでも80数隊を派遣し数多くの成果をあげて参りました。

ヒマラヤ登山熱が高まる中で、本会会員の中から身近に仲間や良きアドバイザーが居ないため、せっかくの夢を実現できない人達から、「休暇の取り易い時期」に、ヒマラヤ登山を実践したい、との希望が寄せられるようになりました。

本会ではこの要望に応えるため、1989年からインド・ヒマラヤを舞台に「サマー・キャンプ」を実施し、93年からは、中国、ムスターグ・アタ(7,546m)を加えました。このたび、サマー・キャンプの舞台として新しく中国、チベット自治区にありますニンチン・カンサ(7,206m)を選びました。岳人の誰にもある「チベットへの憧れ」と、新しい地域を目標にすることによって「未知への憧れ」をも満たせる舞台であると確信しております。また、本会の「サマー・キャンプ」は、総て結集した隊員による登山であります。現地においても隊員がルートを開拓し、荷上げを行い登頂を目指すことが原則であります。従って所謂「ガイド付き公募登山隊」とは全く異なる登山であります。

大自然の摂理は人知を遥かに越えておりますの

で、これまでの経験を十分に活用しながら、細心の注意を払い所期の目的を達成する所存であります。

なにとぞ、趣旨を御理解いただきまして皆様の絶大なるご支援を賜りたくお願い申し上げます。

1997年4月

日本ヒマラヤ協会

ニンチン・カンサ峰登山隊

隊長 天城 敏彦

計画の概要

1. 隊の名称
日本ヒマラヤ協会ニンチン・カンサ登山隊
1997年
(H A J Ningqin Kangsha Expedition 1997)
2. 派遣団体
日本ヒマラヤ協会
3. 目標の山
中華人民共和国西藏自治区浪卡県／江孜県
ニンチン・カンサ峰(寧金崗桑・Ningqin Kangsha 7206m)
4. 目的
* ニンチン・カンサ峰の登頂(西面～南面を予定)
* 山岳自然環境の保全(テイクイン、テイクアウトの実践)
* 日本と中国の友好親善交流
5. 登山期間
1997年7月20日～8月27日(39日間)
6. 隊の構成
天城敏彦隊長以下13名

7. 推進の組織

日本ヒマラヤ協会ニンチン・カンサ峰登山

隊実行委員会

会 長：稲田 定重
(H A J 理事長)

委 員 長：山森 欣一
(同 専務理事)

副実行委員長：天城 敏彦
(同 登山隊隊長)

実 行 委 員：八木原 罔明
(H A J 常務理事)

〃 : 寺沢 玲子 (同 同)

〃 : 中川 裕 (同 同)

〃 : 登山隊員

8. 隊の事務局 (留守本部を兼ねる)

〒170 東京都豊島区東池袋 4 丁目 2 番 7 号 萬栄ビル501号

日本ヒマラヤ協会

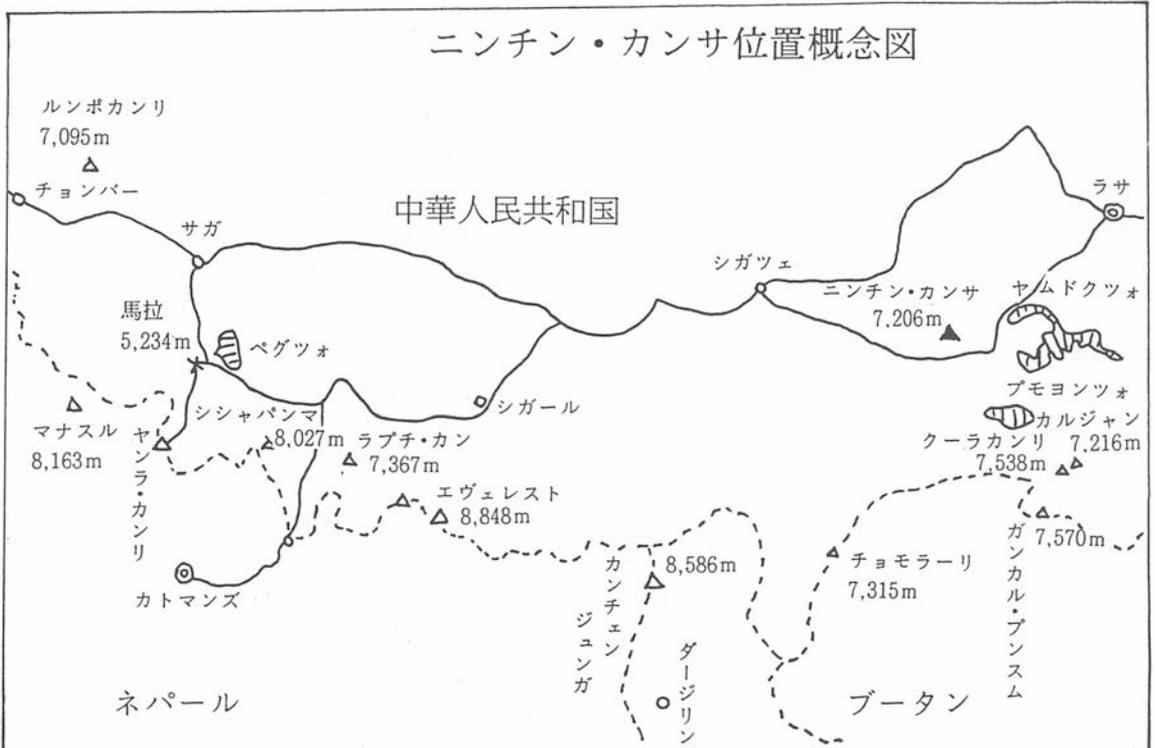
☎ (03)3988-8474 FAX03-3988-8502

夜間：隊出発まで 天城敏彦

〃 : 隊出発後 山森欣一

日 程

- 7月20日 成田→北京 (飛行機)
- 21日 北京→成都 (飛行機)
- 22日 成都→ラサ (飛行機)
- 23日～24日 ラサにて出発準備
- 25日 ラサ→ヤムドクツォ (車)
- 26日～27日 高所順応訓練
- 28日 ヤムドクツォ～BC
- 29日 } 登山期間 (23日間)
- 8月20日 } 登山期間 (23日間)
- 21日 ベース・キャンプ清掃日
- 22日 BC→ラサ (車)
- 23日～24日 ラサ滞在
- 25日 ラサ→成都 (飛行機)
- 26日 成都→北京 (飛行機)
- 27日 北京→成田 (飛行機)



隊員構成

- [1) 住所 2) 勤務先
3) 所属山岳会 4) 高峰登山歴]

隊長：天城 敏彦 [AMAGI Takahiko]

(1947.5. 生) 50歳

1) 〒169 東京都新宿区

2) ㈱有斐閣

3) 無し

4) 1983インド、ヌン (7,135m)

1986中国、雪宝頂 (5,566m) 初登頂

1988中国、ゲニ (6,204m) 初登頂

1990インド、サトパント (7,075m)

登頂

1993中国、ムスターグ・アタ (7,546

m) 登頂

登攀隊長：志小田 美弘 [SHIKODA Yoshihiro]

(1959.1. 生) 38歳

1) 〒981-05 宮城県桃生郡

2) 石巻市立門脇中学校

3) 東北学院大学山岳会

4) 1986中国、チョー・アウイ (7,354
m) 初登頂

1993中国、ムスターグ・アタ (7,546

m) 登頂

隊員：野口 道雄 [NOGUCHI Michio]

(1936.9. 生) 60歳

1) 〒285 千葉県佐倉市

2) 藤倉エネシス(株)

3) 東京白稜会

4) 1988ネパール、アンナプルナトレック

1991メキシコ、ポボカテペトル (5,4
52m) 登頂

1994パキスタン、ライラ (6,986m)

隊員：飛田 和夫 [TOBITA Kazuo]

(1946.1. 生) 51歳

1) 〒343 埼玉県越谷市

2) 日本コムシス(株)

3) 同人パハール

4) 1975パキスタン偵察

1978インド、トリスル (7,120m) 登頂

1981ネパール、ヤルン・カン (8,505
m) 登頂

1983インド、ヌン (7,135m) 隊長

1984中国、ユイロン (5,596m) 隊長

1985パキスタン、K 2 (8,611m) 隊長

1986ネパール、ゴーキョ・ピーク (5,4

83m) 中国、ギャラ・ベリ (7,294
m) 隊長

1987中国、ゲニ (6,204m) 隊長 パ
キスタン、K 2 偵察

1988中国、ゲニ隊長・初登頂 パキス
タン、ガッシャーブルム II (8,035m)

隊長

1989アメリカ、マッキンリー (6,194
m) 捜索

1994中国、ムスターグアタ (7,546m)

隊長・登頂

1995パキスタン、キンヤン・キッシュ

(7,852m) 隊長

1996パキスタン、キンヤン・キッシュ

隊長

隊員：森山 安次 [MORIYAMA Yasuji]

(1949.12. 生) 47歳

1) 〒166 東京都杉並区

2) ㈱ダイワ

3) 無し

4) 1985中国、クラウン (7,25m)

1987中国、ラブチュ・カン (7,367m)

1991雪宝頂 (5,566m) 登頂

1993中国、ユイチュ (6,179m)

1994中国、ユイチュ (6,179m) 登頂

隊員：脇田 康治 [WAKITA Yasuji]

(1950.9. 生) 46歳

1) 〒735 広島県安芸郡

2) 広島中央郵便局

- 3) 広島修岳会
- 4) 1989ネパール、ランタン・トレック
1991アメリカ、マッキンリー (6,194 m)
1993中国、ユイチュ (6,197m) 登頂

隊員：鮫川 太一 [SAMEKAWA Taiichi]
(1950.12. 生) 46歳

- 1) 〒319-14 茨城県日立市

- 2) 明秀学園日立高校
- 3) 小名浜山岳会
- 4) 1985ネパール、アンナプルナー周・トレック

隊員：石川 龍彦 [ISHIKAWA Tatsuhiko]
(1952.2. 生) 45歳

- 1) 〒665 兵庫県宝塚市

- 2) エル・ドラド・インターナショナル

- 3) 無し
- 4) 1983旧ソ連、レーニン (7,134m)
隊長・登頂
1985旧ソ連、コムニズム (7,495m)
&コルジェネフスカヤ (7,105m) 隊長・登頂
1987アルゼンチン、アコンカグア (6,959m) 隊長・登頂
1989インド、ヌン (7,135m)
1996中国、ムスターグ・アタ (7,546 m) 登頂

隊員：加藤 和美 [KATO Kazumi]
(1953.2. 生) 44歳

- 1) 〒494 愛知県尾西市

- 2) 稲沢東高校
- 3) 嶺山岳会
- 4) 1975ネパール、ジョムソントレック

隊員：滝田 収 [TAKITA Osamu]
(1957.3. 生) 40歳

- 1) 〒963 福島県郡山市

- 2) 東邦興産(株)

- 3) こまくさ山岳会
- 4) 1988中国、ゲニ (6,204m) 初登頂
1990インド、サトパント (7,075m) 登頂
1992中国、ムスターグ・アタ (7,546 m) &クラウン (7,295m)

隊員：高橋 敏雄 [TAKAHASHI Toshio]
(1958.10. 生) 38歳

- 1) 〒981-32 宮城県仙台市

- 2) 東北高校泉校舎
- 3) 東北学院大学山岳会
- 4) 1986中国、チョー・アウイ (7,354 m) 初登頂
1993中国、ムスターグ・アタ (7,546 m) 登頂
1995パキスタン、ナンガ・パルバット (8,126m)

隊員：川崎 浩史 [KAWASAKI Hiroshi]
(1964.1. 生) 33歳

- 1) 〒352 埼玉県新座市

- 2) 旬川崎外装管理
- 3) わらじの仲間
- 4) 1986インド、ヌン (7,135m) 登頂
1987パキスタン、K 2 (8,611m)
1990インド、サトパント (7,075m) 登頂
1992インド、トレイサガール (6,904 m) 隊長

隊員：森 達弥 [MORI Tatsuya]
(1970.9.) 26歳

- 1) 〒962 福島県須賀川市

- 2) (福) 福音会 宇津峰十字の里

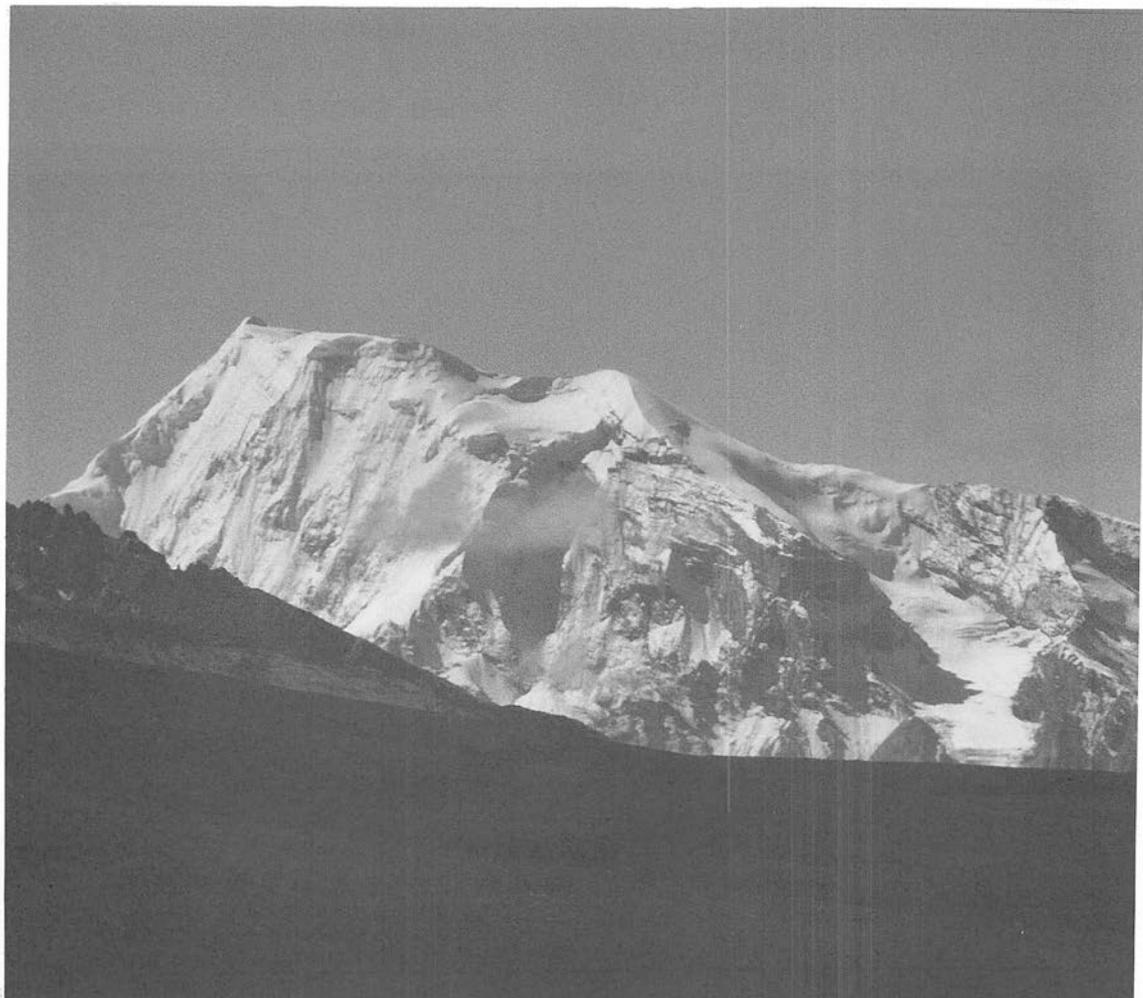
- 3) 無し
- 4) 1988ネパール、メラ・ピーク (6,654m) 登頂
1996ネパール、アンナプルナトレック

未踏峰（カバン6,717m） 隊員募集

中国チベット自治区ジーロン（吉隆）県に在る、全くの手つかずの未踏峰に挑んでみませんか。ガネッシュ・ヒマールとランタン・ヒマールの間には、数多くの知られざる山々があります。そのほとんどは6,000m級ですが、これまで全く試みられたことのない山群です。写真でもわかるように山容は7,000m級の山です。楽しい登山が期待できます。概要は下記のとおりです。

記

1. 期間：1998年9月18日～11月1日（45日間）
2. 人員：6名
3. 費用：100万円以内
4. 資料請求：〒170 東京都豊島区東池袋4-2-7
萬栄ビル501 日本ヒマラヤ協会



■ 寸 感 ■

クーラカンリⅡ峰隊も全員元気に帰国し、漸く開放された留守番。しかし、ヒマラヤ協会の事務局はそんなに甘くない。国内外からの問い合わせや「ヒマラヤ」発行を含む日常の一般業務、それに30周年記念行事の準備等々と、たった一人の専従職員では賅いきれない仕事量の多さに、ネコの手達の出番はまだまだ続きそうである。(寺沢)

事務局日誌 (5月)

- 3日(土) 札幌山岳会ミニヤ・コンカ登頂の報告が入る。
6日(火) クーラカンリⅡ隊便り届く
7日(水) インドの登山家、ボビー・マリヤ氏来局
8日(木) 徳島和男氏葬儀
9日(金) ヒマラヤ307号発送
12日(月) 98年ヌン(7,135m) 仮許可届く。
13日(火) アルパインガイド協会「登山の日(10月3日)」実行準備会(於: ガイ

ド協会事務所: 遠藤)

- 23日(金) クーラカンリⅡ隊帰国
24日(土) ニンチン・カンサ隊、ムスターグ・アタ隊梱包(於H A J事務所)
スノーバー作成(於近喰組作業所)
26日(月) 東京集会(15名)
31日(土) 理事会 総会

ヒマラヤ No.308 (7月号)

平成9年6月10日印刷 9年7月1日発行

発行人 稲田定重

編集人 山森欣一

発行所 日本ヒマラヤ協会

〒170 東京都豊島区東池袋4-2-7

萬栄ビル501号

電話 03-3988-8474

郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

●ガモフバッグ(携帯用高压バッグ/総重量6.7kg)

●パルスオキシメーター

(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店 : 日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先 : 株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階

TEL : 03-5245-0511 FAX : 03-5245-0510

(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

TREASURE TOUR



EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがご答えします。



マウンテンラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-3574-8880

三井航空サービス代理店2452号

遙かなる高みへ



個人・グループの手配旅行、航空券の取り扱い専門デスク



キャラバンデスク TEL03-3237-8384

～地球の果てまであなたのキャラバンのお手伝い～

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

トレッキング・海外登山
シルクロード・秘境旅行
のバイオニア



株式会社 西遊旅行

東京本社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)1391(代表)

キャラバンデスク 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)8384(代表)

大阪営業所 〒530 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F ☎06(367)1391(代表)

カトマンズ営業所 JAI HIMAL TREKKING(P) Ltd. P.O. BOX3017 KATHMANDU, NEPAL ☎221707

運輸大臣登録一般旅行業607号

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カヌー本店/〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店/〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店/〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェア館/〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店/〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店/〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(641)5707
- 高崎店/〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店/〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店/〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟ブラスカ店/〒950 新潟県新潟市天神1-1 ブラスカ3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店/〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店/〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店/〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店/〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店/〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店/〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店/〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外商部(メールオーダー)/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



ICI 石井スポーツ

事務所/〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004